【335】

氏　　名	中　村　　一（なかむら　まこと）
学位の種類	農　学　博　士
学位記番号	論　農　博　第 577 号
学位授与の日付	昭和 50 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	**自然美の理論**
論文調査委員	（主査）教授 四手井綱英　教授 塚本洋太郎　教授 坂本慶一

論文内容の要旨

造園には必然的に植物，動物，水，岩などの天然物が使用される。それにより造園は戸外の美的環境を創造するものといえる。

自然美という抽象的な概念は，造園技術の根本概念であり，方法論を示す鍵ともいえよう。

この論文は理論的に自然美の意義を唯物論的立場から解明しようとしたもので，いわば造園学の原論的性格をもつものであろう。

論文は5章からなり，ヘーゲルその他の自然美論の批判にはじまり，マルクスの自然美の概念の解明により，自然美の契機として，「非抽象」化をとりあげ，「非抽象」化の具体的な諸契機，一般的意味などについて詳細に論述したものである。

その論述のあらましは下記のようである。

現在の美学で自然美を著しく軽視しているのは，ヘーゲル哲学が美学から自然美を除外したことに原因が求められる。ヘーゲルは，芸術美は「精神」から生れたものであるから自然美より高級なものであるとして自然美を軽視はしたが，自然美という概念を無視はしなかった。その結果，自後の自然美論は低調となり，芸術美と自然美との連続性さえも見失われる結果になった。

ヘーゲルのいう「精神」とはマルクスによって批判されているように，対象性を軽視した関係性であって，近代世界において社会関係が資本として物化することを反映している。

この「精神」は「抽象」と抽象化の関係のなかで把握される必要がある。すなわち正確な意味での抽象化は，人間社会の正常かつ必然の物質的発展過程であり，人間と自然を媒介する生産物は，この過程のなかで一層複雑で多くの関係性下におかれるようになる。このような抽象化の方向だけを強調するのが「精神」という契機であろう。これに対しヘーゲルの「抽象」は「精神」から対象性を全く捨象して形式することであり，抽象化のなかで作用する「精神」の硬直的形式化を意味している。この「抽象」は抽象化の過程で観念と感性が乖離する契機であると考えれば，ヘーゲルの芸術美の契機である「精神」を補完し活

かすために，「抽象」を否定する契機として「非抽象」化の契機が提起される。この「非抽象」化こそが自然美の契機である。

マルクスの経済学批判序説に述べられている芸術の不均等発展と歴史的貫通的価値の問題につき考察した結果，この観点が自然美に深いつながりを持つことを見出した。最も肝要なことは，自然美を人間自身の自然，すなわち感性的自然から切り離せないものとしてとらえることである。

自然美の契機は根元的には人間的自然をとりもどす契機と考えられる。

造園の方法論として実際的な意味をもつのは，「非抽象」化を寡媒介化として把握することであろう。より少ない媒介を用いる方向に自然美の契機をみるのである。この意味は決して抽象化の否定ではなく，抽象化の過程にあらわれる「抽象」を否定し，全体としての社会に活力をあたえるために，より少ない媒介によって感性的対象をより確実にとらえることである。その方法として，いわゆる自然的材料の使用や自然物の保全は必要であるが，それだけでなく，簡単な技能や小さな技術を伴ってこそはじめて寡媒介化が実体化されるのである。

この寡媒化の具体的論証として俳諧芸術を例にとると，この短詩形により表現される「風雅の誠」は風土的，大衆的な普遍性に根ざす自然美であり，その表現方法は造園にとっても大いに利用できる。

一方このような大衆芸術が存続するためには，環境の自然条件を保続させねばならないことも明白であろう。

このような芸術と芸術の対象的自然を重視することは，芸術美というよりは自然美の重視である。

芸術美と共に自然美が尊重されることが，人間の社会的意識を豊かにして行く上に是非とも必要である。

論文審査の結果の要旨

現在わが国では高度経済成長により生じた物質文明の進歩にともない，自然環境への再評価が行われはじめた。そして生物学者による自然環境の位置付けが進行し，学際的研究として法理論，あるいは経済理論からの自然環境の見なおしもあわせて開始されている。

このような現況のもとで，自然美としての自然環境論は，直接造園技術に基礎を与えると共に人間の社会的意識を豊かにする上でも必要なことであろう。

本論文はヘーゲルの自然美について批判的検討を加え，次でマルクスの自然美の概念を解明して「非抽象」化が自然美の契機であることを主張したものである。すなわちヘーゲルの自然美が，「精神」を契機とした場合にのみ承認されること，この「精神」はマルクスにより対象を軽視した関係性であると批判されていることを述べ，さらにこの「精神」は「抽象」と抽象化の関係のなかで把握される必要があるが，ヘーゲル的意味での「抽象」は対象性を捨象して形式化していることを述べている。ヘーゲルの美の契機である「精神」を補完して活かすためには「非抽象」化の契機が提起されるが，この「非抽象」化が自然美であると主張している。

またマルクスのいう芸術の不均等発展と歴史的貫通的価値の問題は自然美と深いつながりをもつもので，自然美の肝要な点は自然美を人間自身の自然としてとらえる必要があり，自然美の契機は根本的には

人間的自然を取りもどす契機と考えられること，造園の方法論としては，より少ない媒介を用い，感性的対象をより確かに捕えることであるとして，例を俳諧芸術にとり自然美における寡媒介性，非抽象化を強調している。

以上のように本論文は唯物論的立場から自然美を解明しようとしたものであって，なお多くの実際的論証を必要とするものであろう。しかし今まで芸術美のみが強調され，なおざりにされていた自然美につき新らしい立場から理論的解明に努力したもので，今後の自然環境の維持や造園および造園学の発展に寄与するものとして高く評価される。

よって，本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。